
真・恋姫†無双 ～大剣を携える処刑人～

斬討魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 ～大剣を携える処刑人～

【Nコード】

N1734V

【作者名】

斬討魔

【あらすじ】

どこにでもいる普通の高校生、阿部大和はドジな天使の間違いによつて死んでしまった。その先彼に待っていたのは真・恋姫†無双の世界へ転生することだった！！大和は乱世を行きぬくことができるのだろうか！？

第一話

「お母さん！ お父さん！ 俺、先に逝っちゃったけど元気に過ごすんだよー！！」

さて、なぜいきなり俺がこんなことを叫んでいるかというと…

「申し訳ございませんでした！！」

そこで床が壊れるのではないかという勢いで頭を打ちつけ土下座をしている天使さんのせいなのである。本当は違う人の魂を連れて行くはずだったのに間違えて俺の魂を連れてきてしまったらしい。

「というか俺、あの後どうなったの？ いきなり意識がなくなったから覚えてないんだけど…」

魂を持っていかれたからせい（？）で意識がなくなったので、結局俺の体はどうなっているのかまったく分からなかったりする。

「てかさ、体が無事ならそこに俺の魂入れちゃえば無事元通りなんじゃない？」

「それはそうなのですが……その……倒れたときに道路に飛び出すという形になってしまい……」

「まさか…」

最悪の予想図が脳裏によぎっていく… ハハッ。まさかあ

「はい……丁度そこを通ったトラックが貴方を……轢いていしまいました……」

「うわぁ…」

終わった… 俺の人生… 一度くらい彼女作りたかったなぁ…

「下界で死んだ事になってしまうと二度と戻れないんですよ…」

「なんて事だ…俺まだ20年も生きてないのに…」

「本つつつ当に申し訳ございませんでした！！！」

再び天使さんは床に頭を激しく打ちつけ始めた… そんな事にして
も変わらんのかなぁ…

「もういいですよ…。 そんでこの後俺、どうなるんです？」

俺らの世界では天国か地獄に逝くとか普通に言ってるけど… 実際は
どうなんだろ？

「本来は前世の功績によって天国、もしくは地獄に逝ってもらう事
になってます…」

あるんだ！？ 天国と地獄本当にあるんだ！？ そうなると俺は…

「天国行き？ それとも…地獄？」

どうせ行くなら天国に行きたい！！ てか俺前世で何も悪い事して
ないし天国行きだろうけどな！！ フハハハハ！

「あ、いえ。 貴方は天国にも地獄にも行かないで結構です。むしろ
行かないで下さい！！」

天国行ったらなにしょ… とりあえず先に逝っちゃった曾ばあちゃ

んたちに会おうかな… って、ん？

「今、なんて言いました？」

「だから、どちらにも行く必要ないと…」

「Why? なぜ？」

「えっと… 寿命が来てない人が天国、もしくは地獄に行く…」

「行くと？ どうなるんです？」

「その人を死なせた者、今回は私ですね。その者がお仕置きをされてしまいます…」

「お前がか！！ むしろお仕置きされろよ！？ 寿命来てないのに殺すほうが悪いだろ！？ 自業自得だ！！！」

まったく… 付き合ってられるか。俺はさっさと曾おばあちゃんたちに会いに行くんだ！！ まっててね

「ま、待つてください！！ こんな若い顔で会いに行ったら、曾おばあ様悲しみますよ！？」

「む…」

たしかに… こいつの言うとおりだ。おばあちゃんですらまだこっちに来ていないのに、俺が来たら悲しむに決まっている… かな？

「ならどうしろと？ ずっとここにいろと？ それとも天使になって別の魂を連れて来いと？」

素っ裸で背中に翼生やして頭にわっかをつけている自分… おえ…

「おえええええ…」

「何を想像したのか大体分かりますが… 貴方には別の世界で生きてもらいます」

「別世界？ 元の世界はだめなの？」

「はい。先ほども申したように、元の世界で死んだ事になってしま
うと二度とその世界に戻れなくなってしまうんですよ……」

「それで別世界？ 転生というやつですか？」

「そうなりますね」

おどろいた…… 本当に転生ができようとは…… WEB小説の中だけ
かと思つてた……

「で？ どの世界に転生すんの俺？」

「あ、はい。この三本の棒の中から選んでください」

棒つつても割り箸だね、うん。手抜きだな

「じゃあ…… 真ん中のを」

「はい。これですね」

割り箸には”2”と書かれていた…… 2？

「……あの……2つて？」

「あ、はい。2番ですね」

そついうと天使さん（？）はポケットから”2”と書かれている紙
を取り出した。めんどくさいな

「最初からその紙を引かせれば良かったじゃないか……」

「細かい事は気にしないで下さい……つと、え……つと貴方には『真・
恋姫＋無双』の世界に行ってもらいます」

恋姫か…… 18になつて最初にやった奴だな。三作品とPSP版と

PS2版は全部やったっけ。

「ちなみに他の二つは？」

「え？ え〜と…『恋姫†無双』と『真・恋姫†無双 萌将伝』とありますね」

「全部同じじゃないか！！」

ただ設定とかが違うだけで登場人物おなじやないかい！！

「私に言われても…このくじ作つたの神様ですし」

「神様どれだけ恋姫好きなの！？」

「ここ最近では『朱里はワシの嫁じゃあ！！』と毎日のように叫んでいますよ…」

ここでの神様はどんな人なんだろう…結構あつてみたい！！

「だめですよ！！ 貴方が神様に会ってしまったら私がお仕置きされてしまう！！」

「ちえ〜 まあいいや。それで、俺はすぐに行かなくちゃならない？」

「あ、いえ。1、2年位はいても大丈夫かと…というかなぜです？」

「いや、恋姫の世界に行ったら間違いなく戦いに巻き込まれるですよ？ だつたら強くなっておきたいな〜と」

「それでしたら私の力で武術、智謀、その他もろもろMAXにできますよ？」

「おお…なんてチート…」

「少しは敬ってください！！ それで、どうします？」

「いや、いいや。自分で強くなりたい」

強くなっていくという実感があつたほうが気持ちいいだろうし…

「ふむ…じゃああつちの世界で使いたい武器を言ってください」

「へ？ なぜに？」

「いいからいいから」

いきなりなんだ？それにしても…

「使いたい武器か……」

いろいろあるけどな… あ、よし！！

「じゃあN A R U。Oに出てくる。不斬さんが使ってる首。り包丁
見たいな剣がいい！！」

「ずいぶんマイナーですね…」

しかたなだろう。作者さんの好きなキャラに再。斬がいるのだから
！！（ 本当です）

「よつと…こんな感じですか？」

出てきたのはまさしく首斬り包。！！ おおおお！！

「おおお！！。斬り包丁だ！！」

「強度はすさまじくしてありますよ。1tのトラックで踏んでも砕
けません」

「凄まじいな…」

「あ、でも血を吸っても再生はしませんからね？」

「大丈夫！！ そっちの能力は必要ないから」

そんだけ丈夫ならその能力も必要ないだろう。それよりも…

「これ、なんていう名前？流石に首斬。包丁という名はどうかと思うし…。あとなんで刀なんか？」

「名前は…そうですね…元の名前からとって”斬首刀”というのはどうでしょう？」

「うわぁ…かつこいいけど厨二っぽい…」

「うるさいですよ。後作った理由ですけど…」

「けど？」

「貴方に剣術を教えるためです。持っていく剣を使つての方が良いでしょう？」

へ？ 修行つけてくれるの？ 貴方が？

「ハッハア、何笑えない冗談言つてんすか。間違えて違う人の魂を連れて行くような奴が強いわけじゃないじゃないか」

ハッハッハ。冗談にもほどがある。

「言っておきますけど、私強いですよ？ あなた程度の方なら左手の小指のみで倒せます」

「…面白い。やってみろよ」

「では遠慮なくかかってきてください」

「言われなくても行くさ！ うおおおおおおお！！！」

第一話（後書き）

どうも、斬討魔です。

今回初めて投稿しました！！

誤字脱字などありましたらぜひ仰ってください！！

第二話（前書き）

早くも七名の方にお気に入り登録され、とても感動しています!!
それではどうぞ!!

第二話

「うおおおおお！！ 消えてたまるかああああ！！」

現在、俺様こと阿部大和は全速力で美香の作った特訓場^{ジャングル}に突如現れたティラノサウルスから逃げている。約一年間はこのジャングルにて最低限度の体力を身につけるとかで。ていうか…

「最低限度以上の体力つくだろおおおおおおお！！？」

あ、ちなみに美香というのはあの天使さんです。事あることに天使さんといわれるのは嫌らしい。呼びすてでもかまわないと。さらにちなみに言つとこのジャングルで人間の”死の状態になる”と完全に消えてしまふらしい… なんて恐ろしいんだ！？

「くそお！こんな訓練あんまりだ！！」

ん？ そういえばあのとときの対一はどうなったかって？……負けましたよ！！ ええ！！ ほんとに小指だけでやれましたよ！！ なんだよ！！ 小指のデコピン左肩に食らっただけで左腕吹っ飛んだぞ！？ さすがにすぐくつついたらしいけど… 魂が直接攻撃を食らったわけで… 死ぬかと思った… すでに死んでるけど…

あ、それ食らって目を覚ましたのは十日後らしいです。それ以来、^{チート}美香のことを師匠扱いしているわけで。

「くそっ！！ こうなったら本気と書いてマジでやってやる…！」

俺は背中から斬首刀を抜き取り、一気に走り出した…

○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●

アレから約一年がたった…いやあ、時間の流れって速いね、うん。
え？ 手抜き？ そこは…察してやってください…

いろいろな事があったよ… ティラノサウルスに追われたりプテラ
ノドンにつれていかれたり虎に谷の底に落とされたり… 斬首刀も
最初の一ヶ月間位はともに振り回せなかったし…

「よく消えずに残れましたね。普通の天使でも何人が消えるくらいの
難易度だったのですが」
「今ではみんな友達さ！」

いまではティラノの背中に乗って移動したりプテラの背中に乗って
空を眺めている位だ！ フハハハハ！ 虎にいたっては逆に俺が谷
に落としているさ！！

「さてと…それじゃ仕上げですね」

美香はそういうと何もない場所から刀をとりだした。

「休憩以外の時間、ずっとわたしと勝負です」

「つつしんでご遠慮させていただきます」

「拒否権はないですけど？」

「いやだああああ！！」

嫌だ！！ 死んじやう！！ いや、すでに死んでるから消えちゃう！！ 残りずつとあの苦痛を味わうのか！？

「大丈夫ですって、そんなに心配しないで下さいよ」

「いや、一回目がアレだったんで体が既に拒絶反応を起こしています…」

足をよく見る！ いまた。こつち足につけたら十秒で一万歩いける位にふるえておるぞ！？

「はあ…まったく、なんのために一年間この森に置いたと思ってるんです？」

「へ？ そりゃあ、体力向上のためでしょ？」

「口で言ってもだめみたいですね… こつち来て」

なんだ？ いきなり… ハッ！ まさか！？

「え、えと…その…こ、心の準備という奴が…」

「そんなのいりません。早く早く」

とか言ってる間に俺らの距離は手を伸ばせば届く位になっていた。

「えと…一応初めてなので…」

「は？ 何言ってるんですか？ これで二度目ですけど？」

「え？ 二度目？ そつちこそ何をがぁ！？」

言ってるんだ。と聞きたかったのにそれを邪魔された… あの時のように小指でデコピンされたのだ。あぁ…また十日間寝たきりだな…ってあれ？

「腕が…ある？」

「ね？ 言ったとおりでしょう。今の貴方なら小指のデコピンくらいどうって事ないですよ」

おおう、恐るべし恐竜たちとの一年間… 確かに尻尾でたたかれたり噛み付かれたりしたけどさ。でも、これなら…

「他の指なら骨折くらいはするでしょうけど」

「やっぱりご遠慮させてください！！」

助けて神様！ 朱里はいいから早く僕を助けて！！ 貴方様の部下が罪を増やそうとしているよ！！

「それに毎日骨折してたら修行できなくなるじゃん！？」

「たしかに…それもそうですね」

よしよし… いい感じいい感じ。このまま楽な方面に…

「では、すこし減らしてほかの修行も入れましょうか」

「YES！！」

作戦大成功♪ これで随分と楽になるはず…

「こんな感じでどうでしょうか？」

どれどれ…

〽 6：00 起床

6：10〽 7：00 ランニング（合計50キロの重り、恐竜

による追走あり)

7 : 0 0 ~ 7 : 3 0

朝食

7 : 3 0 ~ 8 : 0 0

柔軟

8 : 0 0 ~ 9 : 0 0

筋トレ(腹筋、背筋、腕立てそれぞれ1

0 0 x 2 set)

9 : 0 0 ~ 1 1 : 3 0

私と一対一

1 1 : 3 0 ~ 1 3 : 0 0

休憩、昼食

1 3 : 0 0 ~ 1 6 : 0 0

私と一対一

1 6 : 0 0 ~ 1 6 : 3 0

休憩

1 6 : 3 0 ~ 1 7 : 0 0

夕食

1 7 : 0 0 ~ 2 2 : 0 0

お勉強(主に軍略、医学など)

2 2 : 0 0 ~

睡眠

「地獄だあああ!!」

なにこのスパルタ!?　いくら俺がゆとり教育で育ってきたからって…

「こんなのはあんまりだ!!」

「じゃあ私と一日中一対一がいいですか?」

「ランニングに行ってきまゝす」

わがままは良くないね。幸い、すでに美香が重りを作っておいてくれたようだし。さっさと逃げよう。

「やれやれ…でも、面白い子だなあ…」

S i d e 美香

「やれやれ…でも、面白い子だなあ…」

正直、あのジャングルに入れたのは彼を消し去るためであった。確実な自分の安全を考えるとそれが一番の方法であつたから…でも

「まさか生きて帰ってくるなんて…楽しみが増えましたね」

ひとりで笑っていると彼…大和が行つた方とは別の方向から違う男が二人きた。

「久しぶりですね…ラファエル、ガブリエル」

「こら、ミカエル。今まで何してやがつた？」

「そうですよ。神様も心配してましたよ？」

「すみません…楽しみができてしまいました」

「楽しみ…だあ？」

そう…大和を一人前にするという楽しみが…

S i d e e n d

S i d e 大和

「へつくしよい!? うう…風邪か？」

背中に寒気が!? なんか嫌な予感がある…

「てか、後ろに恐竜がいる時点でランニングじゃねええ!!」

「こうして俺の地獄の合宿(?)が始まってしまった…」

第二話（後書き）

何かいろいろすみません…

ここをこうしたほうがいい、この字が間違っている、などの意見がある場合はコメントおねがいします！！

次回の投稿は少し遅れるかもです…

これからも頑張っていきますので！

ではっ！！

第三話（前書き）

早くも3500PV、900ユニークを突破したことに感動しています…

それでは本編を

第三話

合宿？がはじまっではや半年が経過した。

思っていたとおり、一番苦労したのは美香との一対一だったなあ…
最初は骨という骨、全部折られたし。でも、おかげで今では素早く動くことも斬首刀を手足のように扱うことも可能さ！！

「さて…次で最後の修行ですかね」

「マジですか！？」

「マジです」

いよっしやああ！！ ついに地獄が終わったあ！！

「最後の修行・・・というより勉強ですが・・・」人を命を奪う”
ということを理解してもらいます」

「え？…命を…奪う…？」

「はい。貴方が行く世界は戦乱の世が続いています。これはご存知ですね？」

「ああ…」

「そんな世界で生きて行く以上、少なからず人を殺さねばならない、
そういう場面に出くわすでしょう」

俺は美香の話を黙って…一語一語真剣に聞いていた。

「人の命を奪うということはその人の人生、その周りの人の人生を
変えるという事と同じことです。まあ黄巾党などの盗賊はそういう
人はいないでしょうが…軍の兵士は少なからずそういう”守るべき
もの”のために戦っているわけです。そのことをちゃんと理解して
ください」

「たしかに…」

「それに、今の貴方の強さなら隊を一つ抱えることになるかもしれませんが。そのときはちゃんと守るべきもののために兵士になった人たちの事を一人一人見ること。これを絶対に忘れないで下さいね」

「わかった…お前の話、絶対に忘れない!!」

「ふむ…嘘は…ついてないみたいですね」

「ちなみに聞こう。なぜ分かる？」

「私は天使ですよ？ 人の心を読み取るくらい簡単です」

「プライバシーの侵害だあああ!!」

さっきまでのピリピリしてた空気が一気に崩れた。知る権利を思う存分使いやがって…

「あのね…知る権利とプライバシーの権利は貴方の世界でのみ使われている法律ですよ？」

「いちいち心を読むなあああ!!」

「まあそんなことは置いといて…さっきの話、忘れないで下さいよ？」

「上手く話を変えられた気がするが…大丈夫だ」

このことに嘘偽りはまったくない。

「分かりました。それではさっそく転生しましょうか」

「へ？いますぐっすか？」

「いますぐっす。実は貴方が消えてしまうまで残り24時間をきっているんですよ」

なんてことだ…もうそんなに経っていたなんて…。それにしても…

「なんか…さみしくなるな」

「そうですね…。でも、貴方と過ごした半年の間、とても楽しかったです」

「俺もだ！！ いままでありがとな！！」

俺は深く頭を下げ、心のそこからの礼を言った。

「さて…、それじゃあその門をくぐってください。あちらの世界の何処かの洞窟につながっているはずです」

「了解」

「あ、後これは餞別で…」

「餞別？」

そついうと美香なにやら懷から小さな袋と手紙のようなものを取り出した。

「お金です。少ないかと思いますが…。少しは足しになるかと。後、この手紙はあちらの世界に着いたら読んで下さい」

「おお、サンキュ」

「それと…これも」

さらに美香は首から十字架のネックレスを外し、俺の首につけた。

「特にすごい能力とかはありませんが…、お守り代わりにして下さい」

「ありがと。能力とかは別にいいよ。気持ちだけでうれしい」

それに俺には美香との修行で手に入れた力があるし。

「それじゃ…そろそろお別れですね」

「ああ、短い間だったけどありがとな！！」

「いえいえ、こつちもいい暇つぶしができましたし」

「もう間違えてほかの人の魂連れて行くなよー」

「余計なお世話です！」

最後に軽い挨拶をし、俺は門を走り抜けた。これから新しい人生が始まるんだな。と、心を躍らせながら…。

S i d e e n d

S i d e 美香

「…行つてしまいましたか」

暇つぶしができたのは事実ですが、彼と一緒に楽しかったのも事実なわけで…

「…これから暇ですね」

とりあえず無事に着くことが出来たか確かめようとしたとき、聞いたことがある声に呼び止められた。

「ありやりや、もう転生させちゃったんだ」

「ラファエル…知ってたんですか。人が悪い」

私の仲間、ラファエルは知っていたらしい。大和を育てていたことに。

「当然だろ？長い間いなかったんだ。理由を調べないほうがおかしいだろ」

「それもそうですね… ということは…神様とガブリエルも？」

「言ってるねえ。けど二人とも知ってたんだろ」

「たしかに…」

ラファエルが知っていた。ということはその上の立場の神様に知れ渡ってもおかしくない。

「しかし…、もったいないことするねえ。あの實力なら天使の中でも即戦力になるだろう」

「そうでしょうが…、こっちのほうが楽しいですよ。それに、彼のためにもなる」

「まあ…そうだろうな」

これから彼のことを見守ろう。そう私は思っていた…。

第三話（後書き）

主人公、ついに恋姫の世界に入った…

結構疲れました^^；

できれば時下言いも早く投稿するようになりますので…！

第四話（前書き）

一日置いてからの投稿になってしまいました…

第四話です!!

どうぞ!!

第四話

「やっとでれた」

約5キロはあるであろう洞窟だった…。おかげでずいぶんと時間を食っちまったうえに疲れたじゃねえか！！　まあ歩いたんだけどね。

「それにしても空気が美味しいなあ」

見渡すかぎり緑。一年間半鍛えまくったからこういう空気が新鮮だ。

「とりあえず手紙を…お！あの木の上で読もう！！」

少し進んだ先に手頃な木があつたのでその木の枝で読むことにした。

「えっと、なににな」

『この手紙を読んでいるということは無事にそちらの世界に着いたということでしょう。この手紙を通して貴方に伝えたいことがいくつかあります。まず一つ目は貴方の名前です。貴方はそちらの世界で「ほうせいこいつちよく法正考直」と名乗ってもらいます。姓が法、名が正、字が考直です。真名は前の世界の貴方の名前である大和をお使いください。法正という方は貴方が知る正史でも実在する人物ですが、そこまで有名ではないので。』

「…酷いな」

『そして二つ目はお金です。実は先ほど渡した袋にはお金ではなく

金貨が何枚か入っています。そちらのお金の基準は良く分かりませんが、その金貨をお金に変えれば何日かは持つかと。」

「おお！？ 本当だ！ 高そうだな……」

『そして最後の三つ目は貴方の实力に關してです。今の貴方の实力はその世界の呂布と同じくらいでしょう。しかし、今の实力に慢心せず、鍛錬を続けてくださいね？』

「おお…… チートつかってないのにチートのような強さになっているんだな、俺」

『伝えたいことは以上です。そちらの世界でも頑張ってください。あ、後この手紙は開いて数分後、爆発しますので（笑）』

「なんだと！！ 一番最初に書けよ！！ しかも最後の（笑）はなんだ！？ 絶対上で見て（ボンッ）ギヤア！！」

熱い！！ 体が烧ける！！ あ、服に！！

「覚えてろよ！！ 美香ああ！！」

同時刻 天界

「アハハ！！」

「うお！？ いきなりどうしたんだミカエル！？」

「こ、これ見てください……ふふっ」

「なんだよ……ぶっ！」

「二人ともどうしたんですか…」
「アハハハハッ」
「??」

Side end

Side ???

「今の音は何だ!？」
「わ、分かりません…熊などが暴れているのではないのでしょうか？」

村の警邏をしていると森のほうからなにやら音が聞こえてきた。

「賊が進入してきたのかもしれん。調べに行くぞ!」
「ハッ!」
「」

何人たりともこの村への進入を許さぬぞ!!

Side end

Side 大和

ふう…。ようやく消えた…。軽く火傷しちゃったぞ。

「くっそ…、とりあえず村に行つて薬でも…」

などと考えながら立ちあがると、

「その者！！ 何をしている！？」

「あ？俺？」

「他に誰がいる！？」

「他には…お前と、お前の部下と思われる人が数名いるな」

うん。ちゃんと状況を把握して適切なことをいったぞ。

「そういうことではない！！ お前のほうに他に誰がいるかといったんだ！！」

「ああ、そういうことが」

なるほど、たしかにこちらには俺しかいないな。

「貴様…、そこで何をしている？」

「何って…火を」

「火だと！？貴様…もしや賊か！？」

「いや、賊じゃないし、俺は火を」

「だまれ！！ 賊の言い分など聞かん！！」

酷い言いがかりだ！！ 人の話は最後まで聞こうぜ！？

「許さんぞ…、この手で成敗してくれる…」

「だあ！！ 待て待て！！ 話を聞け！！」

「問答無用！！！！」

うお！？ 攻撃してきやがった！？

「お前…やる気か？」

「賊の言葉など聞く気はない」

「いいだろう…降りかかる火の粉は払わはなくてはな…」

「フン、面白い。かかって来い」

俺は斬首刀を構え、迎え撃つ体勢をとった…

第四話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回も一日おきになってしまつかもです…

第五話（前書き）

皆さん久しぶりです！

ようやく投稿することができました！！

それではどうぞ！！

第五話

「ハイハイハイハイ!!」

「わっ、ちょ! ちょっとまって!」

さっきはかつこつけてみたけど今は防戦一方だったりする。てかこの人速すぎ。さすがに美香ほどではないけど。

「問答無用!!」

「ええい!! 分からず屋め!! やはりこういつ時は…」

「なんだ!？」

「逃げるが勝ち」

ピューという効果音が付く速さで大和は逃げ出した!!

「あ!! こら待て!!」

「聞く耳持たないね!」

Side end

Side ???

「行ってしまった…」

すさまじい速さだ…。いや、それ以前にあ奴、私の攻撃をごとくはじき返した…。

「あゝ！！ こんな所にいた！！」

「雪か…。どうしたんだ？」

「どうしたじゃないですよ！！ 警邏すっぱかしちゃって！！」

「ああ…。すまない、今戻る」

「ハア…。ならいいですけど」

あの者は…本当に賊なのだろうか？

「…雪」

「？ 何です？」

「最近ここに現れる賊の特徴はどんなものだったか？」

「えっと…確か、人数は三人で、三人とも黄色い布を頭に巻いていたはずですよ」

「！！ そうか！」

「?? どうしたんです？」

「いや…なんでもない」

あの者は賊ではなかった…。ということは私の早とちりだったか…。

「…次に会った時には謝罪をせねばな…」

「なにか言いました？」

「いや、独り言だ」

また…会ってみたいな…。

S i d e e n d

「ふう…、びびった」

こつちの世界に着いた途端襲われるなんて…。ついてないな…。

「とりあえず宿でも探すか…とその前に町に行かなくちゃ」

必死に逃げてきたせいで町から離れてしまった。速く戻らなくては日が沈んでしまう…。

「ま、のんびり行くけどね…ん？」

重い腰を上げ歩き出したが、すぐに何人かの男に囲まれてしまった。

「兄ちゃん、悪いこと言わねえから金めのもの置いていきな」

「…なんだお前ら、変な服装してんな」

腰に剣を付け、頭に黄色の布を巻いている…って！！

「お前ら…黄巾党か？」

「だつたらなんだ？」

「そうか…」

「分かつたらさつさと金めの物を…」

言い終える前に賊の一人は倒れた。俺がそいつを斬ったからだ。

「てめえ…何しやがる!？」

「ちよっかい出てきたのはお前達だろう？賊に手加減するつもり

はない」

「このやろう…が!？」

「無駄口たたいている暇があつたらかかって来いよ」

「くそ…覚えてやがれ!!」

「ふう……………おえ」

賊の一人が見えなくなると同時に俺は吐いていた。殺していないとはいえ人を刃物で斬つたからだ。

「ハアツ…ハアツ…くそ…」

早く慣れなきゃ俺が死んじゃうな…

「…さて…こいつ等はつと」

まだ息があるな…さっきの奴らに渡しに行くか。

「荷物が増えちまつた…今日中に町にいけるかな…」

二人の男を抱え、もと来た道をまた歩き出した。

第五話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回、????の人の名前が明らかになります！

あと、今一刀君を出そうか悩んでいます。
皆さんの意見聞かせてください！！

第六話（前書き）

今回は短めになってしまった…

今回はまさかのあの人が登場するかもです！

第六話

「おっとどっけもつので〜す!!」

時刻は既に夕方、俺は余計な荷物（男×2）を両肩に乗せながら精一杯の大声をだした。

「誰か〜、いらっしやいませんか〜!？」

かれこれ10分位叫んでいるのだが…いつこうに返事が帰ってこない。

「くっそ…、誰もいないのか…」

仕方ないので帰ろうとしたが…

「…あの」

…後ろから声をかけれた。

「何か御用でしょうか？」

「おお!! 君、この人？」

「はい、そうです」

身長は俺より頭二つ分位低め、服装は青を基調としていて、この世界では標準的な服（少々露出あり）を着ている。ちなみにさつき襲ってきた人は、赤を基調とした服を着ている。

「あ、あの…」

「ああ、ごめん。こいつら預かってくんない？」

大男を下に下ろしながら尋ねてみた。

「この人たちって…最近近くに出てくる三人組の二人じゃないですか!？」

「一人は逃げちゃったけどね」

「どうしたんですかこの人たち!？」

「いや、走りつかれて休んでいたら囲まれてさ。まだ死んでないから族の根城でも聞いたら？」

「はい!! ありがとうございます!!」

「じゃ、俺はこのへんで…」

ようやく肩が軽くなったな。とりあえず、さっさと宿探さなくちや。

「あ、もう行くんですか？」

「ん？ ああ、宿もだとしてないからさ。早く行かないと」

「あ! だったらうちに泊まりませんか？ お礼もしたいですし」

「いいんですか!？」

「はい!!」

これはうれしいぞ! 災い転じて福となすとはこのことですか!?

「じゃあお言葉に甘えさせていただきます。俺は法正といいます」

「あ、申し遅れました。私は徐晃といいます!」

「ブツ!」

「? どうされました？」

「い…いや…」

驚いた…。まさか三国志でも有名な徐晃までもが女の子になっているのか…

「とうかなぜ敬語ですか？ 普通でいいですよ」

「そ…そう？ じゃあそうさせてもらおうかな…」

俺らは役所みたいところに賊二人を置いていき、徐晃さんの家に向かった。

第六話（後書き）

まだ????がでない…徐晃は出したのに…
次回はたぶん出ます!!

第七話（前書き）

ずいぶん開けてしまつてすみません…
どう展開させるか迷つてしまいました…

第七話

「ただいま」

「お！ おかえり…」

「げ！」

徐晃さんの家に入ると、そこには昼に俺を襲ってきた人がいた。

「ひ、昼はどうも…ってまで、剣を構えるな！！」

「いや、アレだけの事があれば警戒するだろ！？」

「ひ、昼のことは悪かった！！ 最近出る賊の特徴を詳しく把握していなかったんだ！！」

む、ちょっと涙目になってきているな…。

「まあ、たしかに怪しかったのは事実だし、そこまで言われちゃ…」

許すしかないよな…

「も、申し訳ない…」

「ところでさ、名前はなんていうの？」

俺の横に徐晃がいるわけだから…意外に司馬懿とかかな？

「申し遅れた。私は太史慈という」

「まじで！？」

「？ 何をそう驚いている？」

「私の名前を言ったときも驚いてましたよね？」

いや、太史慈がいるのもびつくりだけど…、徐晃と一緒にいることにも驚いた…。

「？ まあ、自己紹介も終わったことですし…」

「？ いきなりどうした雪？」

”雪”というのは徐晃さんの真名だろうな。

「法正さん、私たちに力を貸してくれませんか？」

「？ なにに？」

「この村近辺に現れる賊の根城を叩きます」

「いや、しかしまだ賊の根城は分かっているのではないのでは？」

「それなら俺がさつき捕まえた奴らに聞けばすむんじゃない？」

さつきやつた奴らに聞けばすぐ分かるだろう。

「はい、幸いこの村には武の心得があるといっている方が私、夏菜ちゃん以外に二名います。その方達にも力を借りればすぐに賊たちを討伐できるかと」

「なるほど…ちなみにその人たちの名前は知ってる？」

「いえ…まだ」

「私も知らない」

「そつか…、じゃあその人たちには明日頼みに行くとして、今日はもう休まない？ あと俺なんかでよければ力はかすよ？」

考えていても仕方がないし、もう夜だ。結構眠くなってきた。

「本当ですか!？」

「うん」

「ありがとうございます!!」

「ありがたい!!」

二人に頭を深々と下げられた。なんか恥ずかしいぞ…

「改めて、俺は法正。これからよろしくな」

「はい！ それじゃあ部屋に案内しますね」

「ああ、ありがと」

こうして俺ら三人は眠りに付いた。もちろん別々の部屋で。

第七話（後書き）

いかがでしたでしょうか？
短めですみません…

次回はもう少し早く投稿出来る様、努力しますので！！

第八話（前書き）

日にちが開いてすみません…

第八話です!!

第八話

見渡す限りの緑、俺は今、徐晃の家の近くの森でランニングをしている。どうもあの地獄の合宿の所為で朝の運動を勝手にしてしまうようになってしまった。しないと体がムズムズしてしまう…。べ、べつにMになんかなってないんだからね！！

「よっし、ランニング終わり！！ 次は素振りでも… って、斬首刀ねえや…」

仕方ないから筋トレにするか…

「あつ、法正さん！ こんな所にいたんですね！！」

妥協案の筋トレを始めようとしてすぐ、僕が居候している所の主、徐晃が走ってきた。

「おお、なんだ？ 何があつた？」

「昨日言つたじゃないですか！！ 今この町にいる二人の人を説得するって…！！」

「そっぴやそんなことも言つてたな。悪い悪い」

「忘れないで下さいよ…。じゃあ私は先に家に戻ってますから、早く来て下さいね」

「おう」

いやあ、跡形もなく消え去つてたな、あのこと。

「まあいいや、さっさと戻ろう」

ところかわって、徐晃宅。

「美味し！ こんな美味しいもん久々に食った！！」

朝食をご馳走させてもらっている。こんなに美味しい物なら早く帰ればよかったなあ。

「あ、ありがとうございます」

「てゆかさ、説得に行かなくていいの？」

「ああ、それならこの食事を終えてから行くつもりだ」

俺の質問に太史慈が答えてくれた。

「ほうほう…、ならば早く食わねばな、もったいないけど」

こんな美味しいものを味わえないのは惜しいが…その旅人サン達も早く行ってしまうかもしれないし。

「すみません…また作ってあげますから」

「急いで食べます！！」

運動後で腹が減っているからな！！ いっぱい食すぜ！！

「なにもそんな急いで食わんでもよかろう」

「あはは…」

二人が何か言ってるけど気にしない！！ にしてもウメエ！！

「…腹いてえ……………」

「あんなにたくさん食べるからですよ」

「自業自得だな」

んなこと言ってもだな…、美味しい物をたくさん食ってなにが悪い！！

「別に悪いことはないが…限度を考えてくれ」

「あはは…」

「ぐうう…」

なんてたわいもない話をしていると、すぐに目的地に着いた。

「ここの宿に泊まっているらしいですけど…」

「見つかるか？」

「店の人に泊まっている人の事聞けばよくね？」

「あ、なるほどー！！」

我ながいい考えだな！！ 頭良いね俺。

「すみません、一週間ほど前から泊まっている人ってまだいますか？」

「ちよいとまってね…」

徐晃が聞くとお店の人は何か名簿みたいなのを取り出して調べ始めた。

「…その時期から泊まっている人はもういませんねえ」

「そうですか…、わかりました、ありがとうございます」

「いなかったか…」

ふむ…、もう旅に戻ってしまった感じですか。

「てかさ、ここから近い国のかたに援護たのめばよくね？」

「それはそうなんですが…、賊なんて自分らで対処しろ！！と言われて…」

「それはひどいな…」

「まったくだ！！ 次に会った時には斬り殺してくれる！！」

「いや、それはまずいから」

まあたしかに太史慈がいたい事も分かるけど…

「そもそもさ、賊って何人くらいいるの？」

「あ、はい。確か… 800位だったかと」

「え？ それだけ？」

「それだけって…、800でも多いほうですよ。まだ他に潜んでいるかもしれませんし」

「いや、それくらいだったら俺一人でも行けそうなんだけど…」

「へ？」「」

いや、だって…

「そんな無茶ですよ！！」

「そうだ！！ 一度にそんなに相手にできるか！！」

「いや、普通に考えたら一度に襲ってくるのは4〜5人でしょ。それに、昨日の奴らに聞いたところ、根城は洞窟とか言ってたし」

洞窟は狭いから一度にそんなに動けないと思うけどな。

「そうだとしても危ないですよ!!」

「じゃあさ、俺が突っ込むから、しばらくたっても戻ってこなかったときには義勇軍つれて突っ込んできてよ。何人くらいいる?」

「えと…ちゃんと鍛えてあるのは100人ほど」

「鍛えてないのは300ほどだな」

それくらいいれば大丈夫だろう。

「大丈夫だって俺を信用なさい」

「でも…」

「ううむ…」

なかなか折れてくれないな…

「じゃあさ、二人と戦って、二人ともに勝ったら行かせてくれない?」

「え?」

「それならいいだろ?」

正直勝てるかはわかんないけど…

「よし、それなら私と先にやろう」

「え? 夏菜ちゃん?」

「何言ってるんだ? 二対一だぞ?」

「何だと…?」

それくらいに勝たないと認めてもらえないだろう。

「いいだろう…、その減らず口、二度と言わせなくしてやる!!」

「夏菜ちゃん!! 簡単に挑発に乗らないの!!」

「決まりだな。じゃ、どっかやれる所いこぜ」

俺は相棒の斬首刀がある徐晃の家に向かった。

第八話（後書き）

グダグダですいません…

第九話（前書き）

本つつつ 当に申し訳ございませんでした！！
こんなに空けてしまつて本当にすみません…

第九話

結果から言おう。二人との試合？は見事に勝つことができた。しかし、俺はこの二人に勝った事をとてつもなく悔やんでいる…。

「大和様、これが今回の被害報告になります」

「おう、あんがと」

「大和様、こちらにも目を通しておいてください」

「ん、りょーかい」

「法正様！！ 兵士全員に食料が行き渡っていません！！」

「……………」

「大和様？」

「ど、どうかなさいました？」

「なんじゃこりやあああああ！？」

どういうわけかあれから義勇軍の長的な役職についてしまった。本当にいつの間にか。

「なんでこんな事になってるんだ！？」

「といわれましても…」

「というか夏菜！！ なぜいきなり敬語だ！？」

「立場が上の方に敬語を使うのは当然でしょう」

「うわあああ！！ 体がかゆい！！」

あと、あの試合の後に雪（徐晃）と夏菜（太史慈）と真名を交換させてもらいました。そのあとにいろいろあつてこんなことに…

「ま、まあいいじゃないですか。大和さんが義勇軍を率いても」

「そうですよ、頭もいいし、強いんですから」
「まあな!!」
「のせやすい…」

何か言われてるけど気にしない。

「頑張つて、みんなをまとめてみせるぜ!!」
「その意気です!!」
「頑張ってください!」

とまあこんな調子で、何回も賊退治をやったりする。嫌なことに、人を切るという行為に違和感がなくなってしまう…。

「法正様!!」

「む? どうした?」

「洛陽から来たと言う者が貴方様に会いたいとおっしゃるのですが…」

洛陽からってことは…、董卓あたりの使者か?

「了解、通していいぞー」

「いいのですか?」

「特に問題ないだろ」

「はっ、かしこまりました」

使者だから…まあ一般兵だろうな。こんな弱小の義勇軍にくるひとなんて。

「おお、あんたが法正かいな。噂どおり強そうやな」
「……」

まさかの將軍様が来てしまった…。

第九話（後書き）

時間を空けた上に短めですみません…

第十話

時刻は不明、現在僕の目の前には將軍様が立っている。というかなぜ！？

「ハ、ハジメマシテ！ ホンジチュハドウイツタゴヨウケンデ！？」

「や、大和様、嘸みすぎです…」

「もつと落ち着いてください！」

「せやせや、もうちつと氣い拔きなや」

「そ、そうは言われましても…」

相手は將軍様だぜ？下手したら軽く処刑とかにされてしまう…。

「それに敬語とか止めてくれへん？ なんか背中が痒くなるんやけど…」

「…普通にしゃべった途端、首はねたりしません？」

「たぶん」

「絶対に普通にしゃべりません！！」

「ハハハハ！！ 嘘や嘘や」

本当だろうか…。いまいち信用できんぞ…、てかその前に、

「俺らに用があつてきたんですか？」

「あ、そうや！ 実はウチんとこの軍師様からお願いと言つか…、提案があるんやけど」

「提案？ なんですか？ まさか仕官しないか？ とかじゃないですよね」

「はっはっは、何言ってるんですか大和様！」

「そうですよ、そんなことありえるわけじゃないじゃないですか」

「だよね」

こんな弱小の義勇軍のリーダー相手にそんなこと提案するわけがない。我ながら夢見すぎだ。

「いや、そのままかなんやけど…」

「アハハハハ……ハ？ スンマセン、もう一度言っ

「てもらえますか？」

「言うも何も自分で言ったやないか」

「本当ですか……？」

「本当や」

「嘘ですよね？」

「嘘やない」

.....

「ええええええええええ！！！！？？？？」

「どわあ！？ うっさい！！ 耳元で大声出すなや！！」

いやマジで！？――瞬自分の耳が腐つてゐるかと思つたぞ！？

「す、すごいじゃないですか！！」

「そうですよ!! 軍師の方自らの勧誘なんて!!」

「いや、あんた等もやけど」

「本当ですか！！？」

「だから大声だすなや!!」

おお！！ 雪たちもか！！ まあ俺ごときが誘われたんだから当然

なんだけど。

「やったな!!」

「はい!!」

「フフフ…、これで強者と槍を交えることができる…!」

「その様子だと…、こちらからの申し出受けてくれるってことかいな?」

「「はい!!」」

「いえ、丁重にお断りさせていただきます」

「なんでやねん!? この流れやとはいやろ!?!」

いや、そんなこと言われても…

「俺、このせ…大陸に来たばかりで…、すこしいろいろな国を見て回りたいんですよ」

「なるほどな…」

「そういうことなんで…、すみません」

「そうか…、しかしあんたほど実力がある奴がおれば心強いんやけど…」

「そこまで俺強くないですよ」

「いや、あんたその二人より強いやろ。ウチの見立てではウチとその二人は同じくらいやと思うやけど…」

「買いかぶりすぎですよ…」

美香からの手紙には呂布と同じ位かそれ以上とは書いてあったけど…さすがに冗談だろうし。

「まあええわ、じゃあ旅がおわったらウチ等のとこ来てくれへん? 歓迎するで?」

「わかりました、ありがとうございます! じゃそれまで雪と夏菜

「…じゃない、徐晃と太史慈をお願いします」

「うう…、私も一緒に行きたいです…」

「わ、私はべつに行かなくてもいいですし…!」

わお、太史慈つてもしかしてツンデレ？

「つん…なんですか？」

「気にするな、とりあえず旅がおわったら何処にも仕官せずにごつちにくるよ」

「約束ですよ…?」

「わかった、わかったから雪、約束するからそんな目で見るな。いろいろ壊れる」

軽く涙目＋上目遣い。理性とか人生とかが壊れてしまう。

「じゃ、いつから洛陽に向かうんすか？」

「そやなく、三日後くらいかな」

「わかりました。俺もそのときに出発しますか」

それから三日間、雪と夏菜がずっと近くにいた…。なぜだ？ うれしいけど…。

第十話（後書き）

むう…さいきんうまく更新できない…
十月までに二回は更新したいです…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1734v/>

真・恋姫†無双 ～大剣を携える処刑人～

2011年9月26日02時46分発行